

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 7 1 : 4 3 - 6 4
Issue date	1899-03-31
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5257
Right	

○狩野教授を送る

寒天霜落ちて風物將に悉く枯稿せむとし、吾人をして轉た寂凄の念に堪えざらむるとき、北風蕭々悲音を送りて曰く狩野先生轉任せらるゝ之を耳にしたるもの、一は疑ひ一は惜む。而して事終に實となり先生第一高等學校長に任せられ玉ふや、其榮轉を祝えし、七百の學徒は眼に萬斛の涙を浮べたりき。謹て惟ふに先生來校以來日月久きといふべからず、然るに一般の整理其間に成りまもの誠に多かりし所以のものは先生教頭の任に當りて能く學校長を補佐せられま結果に非るなきを知らむや。方今の世、學才餘りありて私行脩らざるもの、滔々ときて之を所謂識者の間に見る、獨り先生や精脩崇潔、汚塵の微之を蔽ふとなし。温乎たる貌半、中に嚴正犯すべからざる先生の高風吾人の眼前に彷彿す。出でれば晴夜を天文を學び、入りては教屋に道義を習ふと今より遂に之を先生に得べからざるを思へば

豈に切々の情に耐えむや

去歲十二月二日夜先生の爲に送別の會を張る。

先生徐に告げて曰く我れ豈に妄りに去るに忍び

むや、然れども又如何ともする能はざるものあり、往て彼地に至るの後我に欠ぐる所ある願く

は諸君の補正を乞はむと。辭黻しといへども胸

中懷鬱すべからざるものあるが如き、其夜風雨

頻りに至り、蕭々の聲颯々の音と相和す

咲聚散會離は遂に人生の常情。吾人は茲に謹で

先生の高恩を謝え、先生の驥足是より益々延ぶ

るの時至りまを祝せむのみ

吾人の先生を仰慕するの甚き、直に斯文を草して第七十號

に編せしが印刷部の粗漏にて誤て之を失し遂に本號に掲ぐ

るの止むべからざるに至れり謹謝焉

編輯員白

○自炊紀念會

二月十五日は吾校習學寮自炊紀念日なることは誰も知り居るべき筈本年は實に第八回に相當す其日午後四時食堂にバ紀念式を舉行す賓主各々席の定まるある、委員長厨川氏則ち出で、食堂の眞中に立ち挨拶を述べ言の略に曰く本日は吾習學寮にとりて最も楽しく祝すべき自炊紀念

日である不幸にまて雨天なれども諸君若き滿腔の精神を以て祝し樂まば晴雨夫れ何ぞ撰まむ且つ吾が自炊制度は龍田山の松の青き限り白川の水の流るゝ間決えて絶ゆることなく繼續せねばならぬ將來を有するのである諸君と共に大に本日祝して將來益隆盛を來す基ひを作らふではないかと次に黒本舍監の一場の御挨拶ありて一同祝飯を喫す『腹をはして待ちけり一月十五日』と詠みし風流半分俗半分の句に馳走の概念を讓てそれよりさきは記せず興今や正に酣なり納富氏此時進み出でゝ告げて曰く自炊の記念日は習學寮紀念の日にまて習學寮の紀念は則ち我校の祝事なり一同共に萬歳を唱へむと氏先づ之を三呼すれば衆之に和まて其聲堂宇を動さむとす此日食堂内には紅燈懸り國旗靡き四面の白壁繪と文と詩と句と歌と貼付されて寸地を見ず扁額あり挿花あり裝飾乃ち至れり盡せりといふべく三委員長の御苦勞誠に察するに餘りあり此夜炊事部より配りし茶菓は各室茶話會の基となり歡聲囂々祝聲響々遂に發まては寮内大親睦會となり此の如きの壯快事近來其例を見ず誠に盛なり

と謂つべしとぞ

○演 說 會

三月十三日例によりて瑞邦館内にて演說會あり午後六時半開會との豫定なりしに集會人の少きが爲めにやあらむ七時半に至りて初めて現實の開會を見る羽生部長一場の御挨拶ありて降壇し玉ふ雜報子此時場の一角より見渡せば廣き瑞邦館裡人頭の點在する恰も大海に浮べる船舶の如く、指を屈して僅に六十三名を數へたり嗚呼情けなからずや定め時刻に一時間を延ばして然も其結果か六十三名の聴衆とよ嗚呼情けなからずや全体日本人の横着尙未だ除かれず『集會時に於る日本人の遅延』とは最も陳腐の言にして誰も知れることなれども今日迄尙之を現實に見ざるべからざるにあらずや謹厚の士約を守りて至る所謂才子冷笑して曰く愚直の鈍物よ懷手淋しく彼は獨り數時間を待つなるべしと是れ豈に日本人の眞狀にあらずや之を無學文盲の人に見るのみならば因習の久き容易に矯正し難きを怨まもせむ貴顯の士有徳の人又然りとのことにあらずや

否我は現に今日之を高等の教育ある我が尊敬する諸君中に見たるにあらすや嗚呼世の惰漢を去て日本人の完美無缺を狂叫せしめよ所謂愛國家をして日本完全論を草せよ我は杞憂の一端を述べむ甚きかな日本人の巧輕を弄し僥倖を希ふことや彼等は僥倖を希ふ故に一紗を惜み一事を脩め孜孜として勉むるを魯なりと笑ふなり彼等は巧輕を幸とす故に秩序を守り期約を履むを愚なりと嘲るなり此を以て彼等は謹厚の君子に數時間を浪費せしめて却て之を嘲罵するなり此を以て彼等は秩序守約の士を目えて魯愚の骨頂なりと笑弄するなり人に時間を浪費せしめて恬として氣の毒の顔付さへせざるものは時間の貴重を知らざるが爲めにあらすや秩序を重んじ約束を守るものを笑ふは道德の道の字さへ知らざる動物なるが爲めにあらすや時間の貴重を知らざるは彼等が「榮華は寢て俟て」なる穢なき根柢を有するに基く何となれば僥倖は非勤勉の意味を非素養を意味す即時間の浪費を意味すればなか巧譎を先にして正直を後にするは彼等が肉

慾あるを知りて精神あるを忘れたる卑劣の性質を有するに因る何となれば只衣食の飽を知りて人生の本義を知らざればなり日本に大政治家ある由大文學者ある由大實業家ある由即ち大日本ある由承れり顧みて其素養を問はむ顧みて其秩序を問はむ多くは是れ巧に日本人の此弱點を利用えて所謂「醉枕竊窺美人膝醒握廟堂天下權」的の籠絡主義を以て之を得たるものにあらすやされば道德の基礎頹廢し世教混沌たる現時に於てこそ大政治家大文學者大實業家の大々々など、誇るを得め日月嚴と去て蒼天にかゝり星宿各々天位を守り山聳へ河流るゝが如き整大の時勢に於て之を見る疾風の忽ち來て忽ち去り而して何の功蹟をも止めざるに似たらむのみ嗚呼事や小なるに似たり然れども其動機を考へ來らば深憂するに足るものなからむや人あり陳腐のこと今更繰返すに及ばずといふものあらば我は答へて言はむ陳腐のこと故に益々之を繰返して實行を迫るの要あり何となれば陳腐となるまでも矯正を得ざるは是れ病深く膏盲に入らむとするも

のなればなりと激する所あり直接演説會に關係なき文字を連ぬると正に一千〇二十七字罪誠に大希恕焉若し夫れ七時三十分に六十三名を數へてより一名増し二名加はり九時四十五分開散の際尙僅に百七十名許りの集會者に過ぎざるが如きは是れ直に演説會に關する即演説會の不振を示し即會員の不熱心を表はすものにあらずや『〇〇を〇す』の廣告も近頃に至ては餘り功力もなきに至りたるか却て是れ喜ぶべきか憂ふべきか何れかは何れか非慨して悲まざるを得むや是からが愈々本題に入る演説部委員清家木部兩氏解任の辭と共に一條の希望を述べらる終て豫定の演説乃ち始まらむとす

小山豐太郎と〇〇〇 小林一男君

吾は諸君に我説を述ぶべからざるに至りたるを悲む部長先きに演題の餘り穩かならざるを見て演説を禁止せ給ふ歸りて私かに思ふ我説は半分は政治に傾き半分の半分は滑稽より成り學術は僅に其殘即半分の半分のみ誠に高等學校生の演説たるに不相應なりと故に謹で部長の旨を奉じ

て之を止むるに定めたり深く諸君に謝す

日本人の職責と殖民的思想の欠乏

田口正壽君

吾も又諸君に謝せむが爲めに此壇に立つを悲む遇ま不得已事故生え遂に準備の暇なし約に背くの罪を犯えぬ責全く我にあり深謝々々

王侯將相何有種

萩原玄太郎君

我は斷じて言はむ王侯將相素と種ありと人の才藝誠見の、勤學琢磨によりて益増進するは事實なり然れども天才は生るゝものにして作り得べきものにあらず瓦石と金塊と始めより差異あり驚遂に驥たる能はざるなり之を以て或る意味に於て勉強は不用なり而して人皆勤學に專なるは何ぞや蓋之學は月を浮雲より脱せざるものなり十五夜の月と三日の月と一點の蔽雲なきに於て其光や強弱甚だ異なり然れども是れ天のみ吾人は其清光些の雲影なきを取らむのみ人の大才と小才と亦如何ともすべからず只其分に應じて務むべきなり其分に應じて能く生存競争場裡に存在するを得むが爲め即ち皆勤學琢磨の必用ありされば王侯將相始めより種あらむには勤學遂

に不用なるが如き観あるも是れ皮相の見のみ勤學の必要各人依然と云てあり琢磨の必用万人依然と云てあり。

言語少く局促に失し態度又紳々たる所を欠ぐの恐あり其論旨は暫く言はず結論の不分明にして爲めに何を言はむとしたりかを疑はしめたるは尤も惜しむべしと云す然れども多く責任を避けて偷安を貪る今日君が自ら進で縦横に叱咤したるの勇氣誠に欽すべからざらむや

興地圖的觀察

千手正澄君

興地圖的觀察なる題は何を意義するや、吾之を知らず。只我興地圖的觀察てふ題は少しく大言せば代えて世界大勢論とせむ。熟ら世界を觀察するに陸あり海あり陸は數百の國土となりて分れ國は民情風俗習慣等の差違を生して互に峙立す此差違を生したるは即ち自然の感化之を然らまむる多きに居る。『文化に於る自然の感化の最も重なるものゝ一は海岸線なり之を世界に考ふるに歐洲は海岸線の最も長きもの而て文化世界に冠たり之れを歐洲に見るに希臘は海岸線の最も長きもの而て歐洲文化の先驅者たり日本文化は日本海に瀕する地方よりも太平洋に面する地方盛なり九州の西岸は其東岸より文化

の度高き。次に氣候も又尤も人間に影響を及ぼす天然の一なり寒冷國には剛健の土産し暖熱地には遊惰の民を生ず

世界の大勢を考るに活動力を有するもの尙多く歐洲の民而して歐洲の人種大別して之を三とすべしラチン、チュートン、スラブニック是也ラチン人種は南方にありて從て遊惰に傾きチュートンは北部にありて勤勉の名高くスラブニックに至ては更に一層の剛健なりこれ東北に住するもの。『吾は因て將來の世界を斷せむラチン種次第に衰微に向ひチュートン尙威を振ふて活動すべし兩種衝突の勝敗は之を南米濠洲に西米戦争に亞非利加に驗すべし若し夫れスラブニックは是れ未成の巨人將に之より活動せむとするもの後世誠に恐るべし。』顧みて思ふ日本の地北にスラブニックの精銳を控る台灣を得て南洋にチュートンと接す警戒すべきの時なり活動すべきの時なり

最後に吾は諸君の地理學を研究せむことを勧めむとす専門的に地理學を學べといはず只吾人地理學を研究する第一義は世界の大勢を知らむが

爲なりと言はゞ乃ち足る

論の批評は例の如くなき君に欠くる處は材料の豊富ならざるにあり故に多く事斷の論法ありて如何なる證據ありて斯の如き結論をなすかを示さざるもの往々これあり其言語の抑揚態度の緩急に至ては頗る熟練の域に至らんとするを見る君にして内容の修養を勉むる尙二層而して形式の老熟更に加ふるあらば蓋し將に好箇の辯士たらむとせむ

Life at Cambridge ブランドラム氏

是れ氏のケンブリッヂ大學に學生たりしとき
の經歷を面白く説かれたるもの其詳細は之を
略して此には記るさず次に

學校長

上京中文部大臣に會して大臣の語り云二三の
事を談じ給ふ高等學校は最も人物養成に意を
注ぐべし新興の日本には人物の必要日一日の
重きを加ふ最も修養を要すべき高等學校生た
るもの又思を此に致すこと可なりと

會茲に閉づ雜報子乃筆を擲ふて去る仰けば蒼
宇無窮かの錯落たる滿天の星辰燦なるかな偉
なるかな顧みて思ふ嗚呼人何ぞ陋なる何ぞ小
なる聲を放ちて天を呼ばむかな

○『人物養成』

主務大臣之を高等學校に勉めむことを欲し我學
校長又深く此に意を注がれ演說會席上之を集衆
に告げ且其來らざるものに廣く傳へむことを求
め給ふ吾人報道の任の幾分を有するもの乞ふ一
言を費すを得せまめよ夫れ人物養成や事誠に美
誰か之を知らざらむ殊に國家益々多事に云て人
物の空乏愈々甚き現時の我邦に於ては眞乎人物
の養成最も急務となす維新の革命兒松陰亡び東
行去りしより四十年其の建設者松菊死云々、南洲
遊き甲東騷れ云より正に二十星霜彼等の墓碑漸
く寂玄からむとする今日その剛健の精神次第に
萎微えて偷安と怠慢と乃ち其裡にひそみ來れり
主義の確持理想の確信此等のものは現今の人士
の堪持するに餘りに嚴正なり之を以て微少の誘
惑物に漂蕩えて止る所なからむとす靜に現時流
輩の思想と精神とを檢し來るとき吁誰か又嗟然
として傷まざらむや何の時代か弊なからむ只山
にあるものは往々山を見ざるのみ憶ひ起す羅馬
城頭白馬東風に嘶くところ蓋世の雄シガル劍を
按して社稷の萬歳を謠ひ云ことを彼豈に此裡に
漸入する毒液あるを期せむ然れども羅馬は遂に

亡びぬ時代の漸く萎靡して偷安と怠慢とに漂ふ
際に當りては其内に生活するもの却て平穩の感
あらむ然ども是れ最も恐るべき時、高潔なる新
元素の注入なくむば乃ち痲痺を了せむとするの
秋なり所謂人物養成の急務を叫ぶもの我は先づ
此を以て現今に於る第一義とせむことを欲す各
種の人物又今日の急需にあらざとせず東海波高
くして雄大の外交家の出でむことを望み文界荒
廢して眞個の詩人學者を思ふ念切なりされども
國民の一般に高潔の精神を漲らすべきは更に一
層の急務と信するなり高等學校に人物養成を勉
むといふは醫科に大醫を生せざめ法科に大政治
家を産せしめむとするよりは寧ろ其學生を去て
高潔なる精神と思想とを有する人物たらむを
意味すべきなり蓋し前者は宜しく之を大學に求
むべく大學以上に求むべし後者は即ち主腦とな
るべき人士の基礎然らざるべからざればなり
人物の意義此の如くむば人物養成は乃ち其用に
して其体は畢竟するところ精神教養に歸す人物
養成の成否如何は其間に存在する精神教養の適
不適に基すべし即ち吾人のなされつゝある及び

なまづある日常の修養の吾人の品性に資する
分量の如何にあり故に人物養成に意あるものは
先づ其根本にかへり、生徒に於る受勸及自勸兩
面の精神修養に着眼するを要す吾人のなさるゝ
方面即受勸的の方面切言すれば吾人に施れつゝ
ある教育中に含む精神教育の分量性質が果えて
人物養成に適するや否やは吾人の嘴を容るゝを
許さるゝ方面なれば言を費さず吾人の將に勉む
べき自勸的修養は果して適當に行はれつゝある
かは吾人の大に論考せざるべからざる所なり惟
ふに吾人は國家社會の主要なる一員として國家
社會に高潔なる新元素を注入せしめ國家社會の品性
を去て通じて高潔ならむの抱負を有せざる
べからざるもの此方面に於ては人間とて之の眞
價を有すべき上に於て一部たると二部たると將
た三部たるとに差あらざるなり七百の學徒は乃
ち皆精神の修養を自らするの義務ありといふべ
し瞑目して考ふ汲々として勉むる所のものは乃
ち此の精神の修養品性の陶冶と相反馳する所な
きか無くむば是れ天下の幸なり此に之を攻究せ
むことは此の筆の目的にあらず吾人は只『人物

養成』の意を傳達各人をえて思を此に致す益甚まからまめむと欲するのみ

○江龍俱樂部競漕會(三部八日生投)

時は二月十九日近日稀れる好天氣にて何時もならばグッスと寝込む日曜日なれど飯より好める競漕會見ず知ずも流石に本意なく朝飯もそこそこに江津湖に至る

練習を兼ねての競漕の由なれば裝飾も簡略にて沖に控えたる大連號飾れる旗のひら／＼と西風に靡きこれさへ樂の一つなりけり

扱て順備全く整ひ競漕に取り掛りしは午後一時半

第一回 スタートは赤善くこれにて五分の勝利を得回航にて赤早かりまもトツア腹切りて艇長の心配思ひ遣られ青は回航遅かりしも比較的に難なく總じてビツチ惡しく赤の勝とは初めより知れた事なり

第二回 スタート何れも申分なし赤の航路右に向ひて二回も衝突を行ひしは舵手の罪淺からず青の勝は難なし

第三回 スタート青善かりとかど回航は拙の拙

赤は二本丈け遅れて回りしかど回り終りま時れ二本丈け早かりし後にて聞けば青は回航用意なかりし由これも又舵手の罪か青は中途に止めたれば赤は獨り決勝線に入る

第四回 何れも揃ひて回航赤善しと見えまか實は青の方善かりし赤の回航を誤りしは残念五艇身余の差にて青の勝

第五回 赤のスタートは惡まかりしかど青のローリングは實に甚しかりき回航用意は青早かりまかど手際は赤の方善し販略は双方リーター共に勞れラストへビーに赤の方向を急に變せまは如何にや青の勝にて可なりのレースなり強て難を言へば余り馴れざる人の多き乗組にはビツチ早かりと思ふは誤れるにか

第六回 双方共スタートに評なく赤の回航善く回航後直ちにファオルま青舵をまげて之を避く販航は何れも乱調子にて方向も一定せず又々ファオルとは情なし赤一艇身の勝なれど賞めたものにあらず

第七回(來賓) 一部二部よりの來賓競争にて何れも此道の勇者なれば比較的善き方なり青スタ

ト善く如何なる譯なりしか艇の平均甚だ悪しかりしが如き回航は青早かりき赤のビッチ急にして一番二聯の伴ひ得ざりしが如く見えは僻見か青のラストへビー善く効き乗組一同喜びつゝ決勝線に入りしは可愛らしく又心にくかりき第八回 何れもスタート悪しく回航にかゝりしは赤早かりしもリーダー機を入れ損ねて遠廻りて青に遅れたり回航後赤のリーダー名譽を快復せんとて力漕に力漕を加へ進み来る勢凄く見る間に青を抜き三艇身余の差にて勝

第九回(來賓) 青スタート善く回航又宜き優に勝を占めて決勝線に入る

第十回 スタート何れも難なく回航亦宜し青のゴール際にて中止せは珍魚にても見出せまものや亦得々として進みて勝

第十一回 これ最後の競漕にてスタート何れも善く青せかず赤急かず一艇進めば他艇進み何れか勝とも見えざりける回航にかゝりしは青早かりしかど惜まきかな二番腹を切りトップも此騒きに二三本は中止まかてゝ加へて艇の余りゴールに間近なりまかばリーダーバックを思ふ儘に

なま得ず此間に赤は回航を終り青に先づ二本此勢に乗じて舵手青の航路を奪ふ青のペビーは効なきにあらねどカーレントの中にありて艇進まず赤の勝とは是非もなし

今回の競漕は總じて舵手の手際悪しかりき競漕の勝敗は重に舵手の命宜きを得るにありとか聞く特に舩航に舵を取るは最も不利益なる由舵手諸君勉めよや

例もながら約束を守らぬ人の多きには驚かざるを得ず折角番組出来上りて當日となれば不參多くて番組掛を困らす杯は賞めた話にあらす近年全盛の域にある三部諸子假りにも兄等が名譽を落す勿れ

○一部競漕會

(平氣生授)

二部に有明俱樂部あり三部に江龍俱樂部あり試みに其名の出づる處を索ぬるに肥後と肥前の間に海あり風光清絶世之を稱えて有明海と申す熊本縣飽託郡に江津湖と申す湖ある由また第五高等學校となん申す學校の北に龍田山と申す山ありと云ふ蓋し其名の出づるところは茲にあらん

夫れ名は實の實なりと誰やらが申しゝと覺え候されば名と云ふものも滅多には付けられぬものにや熟ら世間にある種々のものを見るに多くは名と實と因ある様なり龍山の南にあるが故に龍南會慈惠の目的なるが故に慈惠會校友を以て組織するが故に校友會さては憲政の何とかを望むが故に憲政黨時を計るが故に時計耳をかくが故に耳かき革の化けたるが故に靴、書狀を入るゝ袋なるが故に狀袋器物にして大徳利益あるが故に徳利酒をつぐが故にさかづきと云ふが如し獨り怪まむ何のために何に因みて有明俱樂部と云ひ江龍俱樂部と云ふか有明俱樂部と云ふたとて二部の端艇會江龍俱樂部と云ふたとて三部の端艇會を意味するか小生其の如き愚物には一切不分明に御坐候これも例のテクニカルチームか若しくは濁りたる川を白川と云ひ又は猿股と云へば必ず其色赤かりそうなるに白き猿股あるが如き(股の白き猿の居るやも知れねど)の類か或人は之を解して曰く有明俱樂部とは有明海の風光を愛するの餘りに出で江龍俱樂部とは江津湖に於て龍山の麓にある學生が端艇を漕ぐが故なり

とさて名と云ふものは奇妙なる處より出づるものかなこれを聞けば御尤らしく候が有明海を愛するは二部の人にも限らざるべく江津湖に於て漕艇する學生とて三部の人にも限らざるべし專賣特許も何千と云ふ程に多くては貴からず頌徳碑銅像なども野原の古塚又は地藏尊の様に其處にも此處にも建てらるゝ今日少々實を明らかにせねば漠然たる名は一切何やら見別けが付かず候それにつけても一部の人々が異名を撰ばざりしこそ殊勝なれ一部端艇會とはさて適當なる名なるかな嗚呼小生はつまらぬ事に無用の筆を弄せまよ二部三部の勇士の御立腹は元より期する處に候らへ共若し都合あしく候はい此以上八百〇二字だけ御除き被下れ度之編輯子足下時は二月の二十六日四方の山々も霞の衣を帶び木々の梢にも青き芽ざしのあらはるゝ今日此頃人も勇み駒も勇み狂人も勇る勇みゝて鐵腕遂に江津の湖に於て大に鳴る(何の事やら)前日より晴れやらざりし大空は拭ふが如き好天氣となりぬ日頃惡口罵詈を本職なる平氣生何とて閑居えてデル、デス、デム、デンをうならんや

一部の競漕會これ屈強の惡口の種と一目散に江津の湖畔に向つて飛び出す

揭示場には正十時開始とありまに何の事ぞや十時も過ぎ十一時も過ぎ午砲も響き零時半と云ふに漸く始まりぬ腹中は無一物となりて得意の惡口も中々に出す勇氣もなくなれり

第一回スタートは赤宜ま青はたまかに二三本は無効に漕ぎぬ概して赤はビッチ甚だ早かりまが如之廻航は赤先づ之を終へ青はこれに後るゝこと三本あまり廻航後青は侮るべからざる勢を以て突進し始めたりまも因縁の然らまむる處か三艇身の差を以て赤の勝となりぬ

第二回號砲少々不公平なりまが如く然れども赤の勝は勿論の事なり元來組合不釣合なりまもの第三回舵を取りては一部無双の勇士なるも如何せん漕手の練習足らずビッチ始終乱れ勝なり赤はビッチ可なりに調ひしも餘り早過ぎる感なきにあらず勝は一艇身半の差にて赤に歸せり併し

ビッチの早さは一利一害に御坐候

第四回スタートは青宜し廻航も亦可なりまも天運の歸する處は致方もなく僅かに三尺余の差に

て赤に勝を制せられまは御殘念の程思ひやらる第五回勝負にはなり兼ねる様の感なき能はず赤の勝は當然に存する

第六回スタートは共に不可なりビッチは赤宜ま青は整調のみ拔群にて却て不都合を生じビッチまも合はず赤は非常の猛勢にて決勝線に入る其差殆んど十艇身

來賓競漕こは三部三部工學部の混成にして何れも此道に堪能なる人々なり勿論惡口生の特技も中々以てこれには用ゆる能はず候兩艇一齊に突進しぬ何れか勝ち何れか敗るゝ廻航後赤の整調少ま疲れビッチまた亂れんとするや赤の舵手はこゝぞと一、二の號令をかけ始めたり青の整調鬼を欺むく金剛力を出まて此時ぞと云はんばかりの勢にて決勝線に漕ぎつたり其差殆んど一艇身なり

引續き來賓第二回を行ふ筈なりしも番組につきてひまどる事情あれば此間に第九回を繰り上げて之を行ふ

第九回兩艇共其漕手は一部に於て第一にあらずんば少くも第二位に位する人々なりさればビッ

ずもよく整ひたり青の整調ビツチ早きに過ぐるが如きこれ恐らくはバックの足らざるがためかされど其腕の強きには感心なり僅々一二尺の差にて青の勝となる観者手に汗を握る

來賓第二回別に申すこともなき赤の勝

第七回青の整調は丸山先生なり頗る此道に達せらるゝものゝ如き遂に半艇身の差を以て青の勝となる先生萬歳の聲は彼方此方の岸に響きぬ

第八回舵手は撰りも撰りたり組むも組んだり一方は金剛身に身を固めたる大の男、一方はたてころび徳用の人物なり廻航後青の舵手は漕手を勵まさんとにや漕手に向つて水かけはじめぬ赤の舵手も之にならひぬ水煙高く飛び兩艇の上虹を生せんばかりなり半艇身の差を以て青の勝は見事併々水かけは時候柄少々寒かりきならん漕手殿達御風はめさゝりきか流石の平氣生も他事乍ら御察し申す

第十回こは一部の老将の乗組なりスタート何れも難なま回航も大差なかりきが如し赤の二番大に疲れ憊をぬぐこと二本あまり最後のヘビーも兩者共よくきゝたり半艇身の差を以て青の勝と

なる赤の舵手殿近眼なるが故か歸路の方向は甚だ不利なりきが如し或は別に思ふところありての處業か御伺申上げ候惡評多罪

競漕はこゝに終りぬ陸上の人影も何時しか散ま去り湖面に浮びき小舟も葦蘆の間にかくれ終りぬ今まで壯士の鐵腕にかき亂されし湖面は再び鴉鳥の世界とぞなりける

自愛せよ一部の壯士、會稽の耻を雪ぐの日は將に近きにあらんとす平氣生刮目きて傍觀するあり諸君それ恐るゝこと勿れ呵々

○豫じめ四月の競漕會に就て

(一部擬概生投)

嗚呼四月の大競漕會は二旬を出でずして將に來らんとす畫湖の畔彩旗翻々として櫻雲菜黃の間に翻り幾千の士女歡呼拍手の裡濟々たる健兒鐵腕を揮ふの狀想ひ見るべきなり

『往年端艇部が一大飛躍を企てし以來當局者の苦心は筆紙のよく盡す所にあらず幾百となき障礙は其の進路を阻隔えてあわや折角の設計も水泡に歸せんとせきもの幾度なりきぞ、きかも變に遇ふて愈其の志を固ふき遂に擴張委員會と云

ふものを組織えて其基礎を固めたり云は昨年
の事なり云に爾來其事務大に進歩せし端艇
四隻も十日を出でずして竣工すべく且又神水村
に設けらるゝ艇庫も己に棟上げを終り云由誠に
目出度き事の限りに御座候」とは吾人が嘗て在
京の友人に寄せたる書面の一節なり今や端艇部
は昨年の端艇部にあらざるなり其規模の大なる
其器具の整頓せる優に鎮西の天地を壓するに足
る斯くも盛大なる端艇部の大競漕會而かも其進
水式を兼ねたる大競漕會其歸況以前に倍する處
あるべきや疑なきなり

吾人は昨年の大競漕會を記するに方り聊か卑見
を陳えて部員の反省を促しき蓋し吾人の哀情端
艇部の將來に就きて憂慮措く能はざる處ありた
ればなり吾人は決えて本年も亦昨年の醜体ある
を信ぜざるなり否此の如き醜体なきを信するも
のなり諸君希はくは吾人をして昨年の歎を再び
せまむることなかれ今や各部撰手は略ぼ確定し
各其責任を雙肩に荷ひて其決戦の日を挨ちつゝ
あり諸君の鐵腕必ずや長鳴するものあらん
我端艇部起りて以來撰手競漕の行はるゝもの三

回内勝利回数を擧ぐれば二部は一回三部は二回
而して一部獨り一回たも勝利を得ざるのみか着
順また常に第三着にあり吾人嘗て之を聞けり一
部人多々然れども奮勵の度に於て遙かに他の二
部に劣ると吾人は其言の當れるや否やを知らず
と雖己に此嘲を受く所以なきものあらざるべし
一部諸君少しく奮發する處あれ嗚呼桂冠豈永く
他の占有に歸せしむべけんや

○敢て訴ふ

小生は通學生にて候ふされば時間々々の休息時
には生徒控所の片隅にツクチンと云て佇立致し
居り候元來極々内氣のたちにて豪傑連の中に交
るべき勇氣も無之さりとて其間に課業を調べる
氣根もなく候まゝせめて其ひまつぶしに新聞雜
誌なりと讀まんとて東京の去る處に注文致し二
三種の新聞雜誌を講讀致し居り候先月までは學
生への郵便物は皆學寮課の机上にて受取り居候
らひ云が近頃學寮に於て郵便物の通學生に属す
る分はすべて控所内に設けられたる郵便物差し
に入れしめらるゝことゝ相成候然るに其以後に
於ては往々小生に宛てたる新聞雜誌の紛失致す

こと有之候諭よく／＼探索致し候ふに小生の
と全種の雑誌新聞は有之候らへ共帶封は脱却し
て誰のものやら一切分り不申多分これが小生の
ものならんとは存せざるにあらねど若き取りち
がへて拳骨の御見舞を受くることもあらんには
蒲柳の質のもしや息の根とめらるゝことあらん
も計り難くて躊躇致し居り候かゝる迷惑を感ず
るはたいに小生一人にては有之まじくかゝる事
は甚だ以て宜しからずと愚考致し候若き小生が
面相今少しドウカ有り候らば御依頼申さずと
も教室まで持ち來る勞を辞せざる親切なる御方
も有之候らはんか元來造物者殿の不公平にも少
々小生が顔の上に戯ひられ居る事なれば如何
にも致方無之候されば只諸君の宏量に訴ゆるの
みに候たとひ四海皆兄弟とは申せども何事も已
れの兄弟らしく無答にて披見致され候ふては大
迷惑に御座候(一通學生投)

○龍南會委員の改選

三月十一日龍南會委員の改選を行ふ當選者を記
す

總務委員 森田万次郎

平田 全祐

弓術部	内藤 善助(再)	山口 正男(再)
柔道部	白川 彌源太	宮崎 祐助
擊劍部	野老 山長角	中島 檀吉
演說部	川本 良樹	菊池 剛太郎
運動部	相良 武雄	磯 适次郎
端莊部	岸川 太郎 <small>(柔道部ヨリ轉ス)</small>	永村 清(再)
雜誌部	杉村 徳次郎	
	柳井 幸弘	大木 俊九郎
	戸次 正(再)	島田 敏三
	常吉 徳壽	

戸次正都合により任を辭す後任未だ定まらず

修學旅行

君聞すや火州西南西海の陸龍田山麓群龍蟠るを
蘇岳の巍峨たるは鵬飛を試みるに足り畫湖の清
冽なるは以て道機を悟るべし龍山依々として綠
益々綠に白川逶迤とえて水愈流る竹刀の憂々た
るは龍山の響きか呬唔の囁々たるは白水の音か
武を誦じ文を修むるは吾黨の業偏せず黨せず武
威維れ揚り黨せず偏せず文名維れ加ふ請ふ見よ
東洋の天地怪鷺翼を張りて双瞳光を凝らえ猛虎
爪を磨して怒號山嶽に振ふを弓矢尙成らず網羅
未だ修まらずんば鷺虎の跳梁を夫れ奈何せん言
ふこと勿れ干戈威揚是れ我が業にあらんと我れ
聞く佛に二道あり曰く攝取曰く折服と德光未だ
和せず暴慢我に加へば遂に折服の已むなきを得
ざるに至らんのみ由來此地傑士の出る所古に稽
へ今に顧みば豈徒らに几邊に躊躇する時ならん
や況んや軀軀の強弱は志氣の伸縮に關するもの
あるをや想起す昨年の秋我較修學旅行を行ひ深
く神代古蹟の叢地を探り健脚能く日肥の山坡を
阪蹴ま武を硝烟の裡に試み以て志氣を養ひ之を

爾來秋去り冬過ぎ春經て夏臻り再び此に落葉の
地に藉くを見るに至る此に於て十一月十六日よ
り我較更に武を城北の野に講せんとす只恐る日
子僅かに三日或は健兒の健脚を試みるに足らざ
るやを

十二日、隊伍編成を舁操場に行ふ從軍の健兒五
百意氣軒昂心猿已に城北に馳す當に知る軍旅一
度舉る時筆硯を投じて忽ち硝烟の間に馳驅する
を分て二となし小隊長以下各々部署を定む

十六日、昨夜陰雲天を蔽ひ雨脚下らんと欲して
尙未だ下らす雲行愈急にえて天變の將に至らんと
するを告ぐるが如き征客窓を推えて征途の恙
なきを祈る天感せまか神通せまか早曉窓を開け
ば列宿參差風靜かにえて毫も雲翳を止めず即起
て旅裝を爲し走せて校内運動場内に集る健兒銃
を肩にえて擊劍憂々たり嗚呼山河蕭條とえて草
衰へ風悲み孤雁一聲秋昊を渡るに當りては誰れ
か秋思胸に滿ちて萬感情を素さるものあらん
や風蕭々とえて易水寒く單身七首を抱ひて父鄉
を辭す壯士の心情寧ろ憐むべきのみ然れども翠
靄模糊として遠山を罩め蕩々たる江河萬波を揚

ぐる時樂を横へて戎軒を事とす健兒の胸中實に
洒々たるなからんや列已に整へば號令忽ち發す
列中聞とまて一語を發するものなし中川校長即
前面に立ち諭えて曰く今や秋高く馬肥ゆる時に
當り我校茲に修學旅行を行ふ旅行の目的は今更
ら呶々するを要せずと雖も要するに兵式躰操を
實地に修鍊之筋骨を鍛ひ旁ら他學科に資するも
のあれば之を取るにあり此故に隊伍の編成一に
軍隊の組織に従ふものなれば必ず上官の命令を
守り躰操教員の支揮に従ひ敢て或は怠ることな
かるべし思ふに今や我が中原に於ては 大元帥
陛下の統監し玉ふ特別大演習の舉あり此時に當
り我が校亦發火演習を城北の野に行はんとす行
中敢て不規律の所爲あるべからず又宿所の不平
を鳴らすべからず殊に衛生上の注意は最も肝要
の事にまて各自怠ることなかれとつゝきて沼田
監督亦告ぐる所あり告諭終る鉄笛空に冴へて行
進を促がす時正に八時廿五分なり隊伍正々校門
を出づ此日天晴れ氣澄み朝暾麗かにして空に隻
翳なし只颯々たる秋風の龍山を度るは此行を送
るものか滔々たる白水の鳴て止まざるは征途を

壯にするものか整然たる歩武は鬨曉の響に和し
鏘然たる劍聲亦一層の威風を添ふ三軒町を経て
菊池街道に出づ只見る眼界俄かに廣く諸山錦を
飾りて秋景に富むを行くこと里餘路岐れて二と
なる右するものは限府街道にまて左するものは
來民に通ず此に於て全軍亦分れて兩道に向ふ緒
方伊形兩教官の卒る東軍は右に向ひ島野教官の
卒ゆる西軍は左に向ふ人或は東軍を稱して獨軍
と云ひ西軍を英佛同盟軍と稱す蓋之行に従へる
諸教授によりて之を云ふなり今や兩軍已に分る
知るべし士氣益々揚りて意斗牛を呑むの慨ある
を思ふ昨は文教學窓を俱にして今は武略干戈の
間に見ゆるを東軍先づ發えて限府に向ふ行く行
く相語るものは翌日の戰策を講ずるものか四山
を回顧して意氣揚々たるものは所謂是れ詩思的
思想の勃發せまものか紅紫一枝胸間に挿むもの
は挿梅の源太を學ぶにあらざるなきか進むこと
二里餘泗水村に至る時將に午に垂んとするを以
て午餐を喫す休憩一時間再び隊伍を整へて發す
一團の握飯にて元氣益々揚りまものか軍歌一齊
に勇ましく石礫途に滿つるも毫も意に介せざる

ものゝ如し愈々進むこと里許眼下忽ち菊池の平原を萃め右方遙かに菊池の古城を見る健兒快然躍て平原に出で坦途を傳ふて隈府の町端に至る此に於て教官告諭する所あり二時四十分隈府に入り草鞋を解て宿舎に就く

隈府町は熊城の北方七里にあり菊池氏累代の古墳あるを以て有名なり菊池神社は町の東微北端にあり櫻花千樹祠前に連れり花時威靈を吊するもの殊に夥し想ふ昔逆賊鷗張を擅に玄天日爲めに暗き時に當り獨り西陲の孤城に據り生死を全くして龍種を擁護せしを我れ嘗て花時威靈を吊せまことあり謂へらく巍峨たる其威蘇岳と共に高く馥郁たる其名櫻花と共に香えと昔頼襄此地に來り歌ふて曰く世守芳根全晚節翠楠未必勝黃花と嗚呼誰れか此地に來りて熱血滂沱往古を追懷せざるものあらんや祠の西方武光の墓あり正觀寺は其西方にあり菊池氏の菩提寺なりと云ふ武重の墓は今亘村にあり此日社務所に至りて所藏の寶物を拜觀す千本鎗の一正宗の名劍其他文書數十一室に展列せらる拜觀終りて宿舎に歸る先是西軍は來民街道に沿ふて既に來民にあり翌

日を俟て互に相會戰せんとす兩軍の幹部諸士相會えて作戰計畫を議す此夜陰雲天を蔽ひ雨師の至るを促す兩軍將士の苦心察すべし本日行程未だ以て健脚を試みるに足らずと雖も亦少しく疲勞の感なきにあらず乃ち衾を擁て寢に就く十七日、昨夜寢に就て將に華胥の國に遊ばんとす忽ちにえて干戈夢を驚かし劍聲鏘々頭上に鳴る半宵枕を蹴て戸外を窺へば雨聲滴々簷端に鳴り暗雲朦々四空を蔽ふ健兒果して快夢を貪るか天候無情一日の快晴を借すことなきか曉きに至れば雨脚全く止まずと雖も檐聲漸く幽にえて僅かに半宵の名残を留むるに過ぎざるのみ乃ち出で、隊伍を整ふ

今回の行軍素より發火演習を以て主眼とす其兩軍の想定は如何曰く

想定

東西兩軍は山鹿に通ずる國道を前進す
兩軍支隊を派遣えて其則面を警戒す

と東西兩軍の命令には曰く

東軍命令(口演)十一月十六日午前七時
於 熊 本

一 敵は山鹿にあり

二 本隊は植木を経て山鹿に向て前進せんとす

三 貴官は歩兵第一大隊を率ゐ即時熊本を發し須屋小屋を経て隈府街道を前進し本隊の右側を警戒せよ

西軍命令(口演)十一月十六日午後三時
於山鹿

一 敵は熊本にありて出師準備中の如き

二 本隊は山鹿に通ずる國道を前進し熊本に進入せんとす

三 貴官は歩兵第一大隊を率ゐ明十七日午前七時三十分來民を發せ隈府街道を前進せ本隊の左側を掩護すべし

と兩軍の支隊各々一大隊より成り東軍は來民町にある西軍を撃退し自ら之を占領し山鹿にある西軍の本隊にある後を扼し以て本隊と夾撃せんとす

東軍支隊命令(口演)十一月十七日午前七時
於隈府町

一 敵は來民町附近に在るものゝ如き

二 我は砦村を経て來民町を占領せんとす

三 第一第二中隊(一個小隊欠)は前衛即時出發

四 第二(二個小隊欠)第三第四中隊は本隊

(假設)

五 大小行李は本隊の後尾に跟隨せよ

六 余は本隊の先頭にあり

教令

一 敵は帽に赤布を纏ふ

二 空砲十五發使用

西軍の支隊は東軍支隊の隈府より來るを知り其進路を遮り以て本隊の熊本に向ふに後患なからしむるにあり

西軍支隊命令(口演)十一月十七日午前七時
於來民

一 敵は隈府附近にあり

二 我は來民町東端の要地を準備す

三 第一中隊は道路の左方第二中隊の第一、

第二小隊は道路の右方を守備すべし

四 第二(第一、第二欠)第三第四中隊は援隊

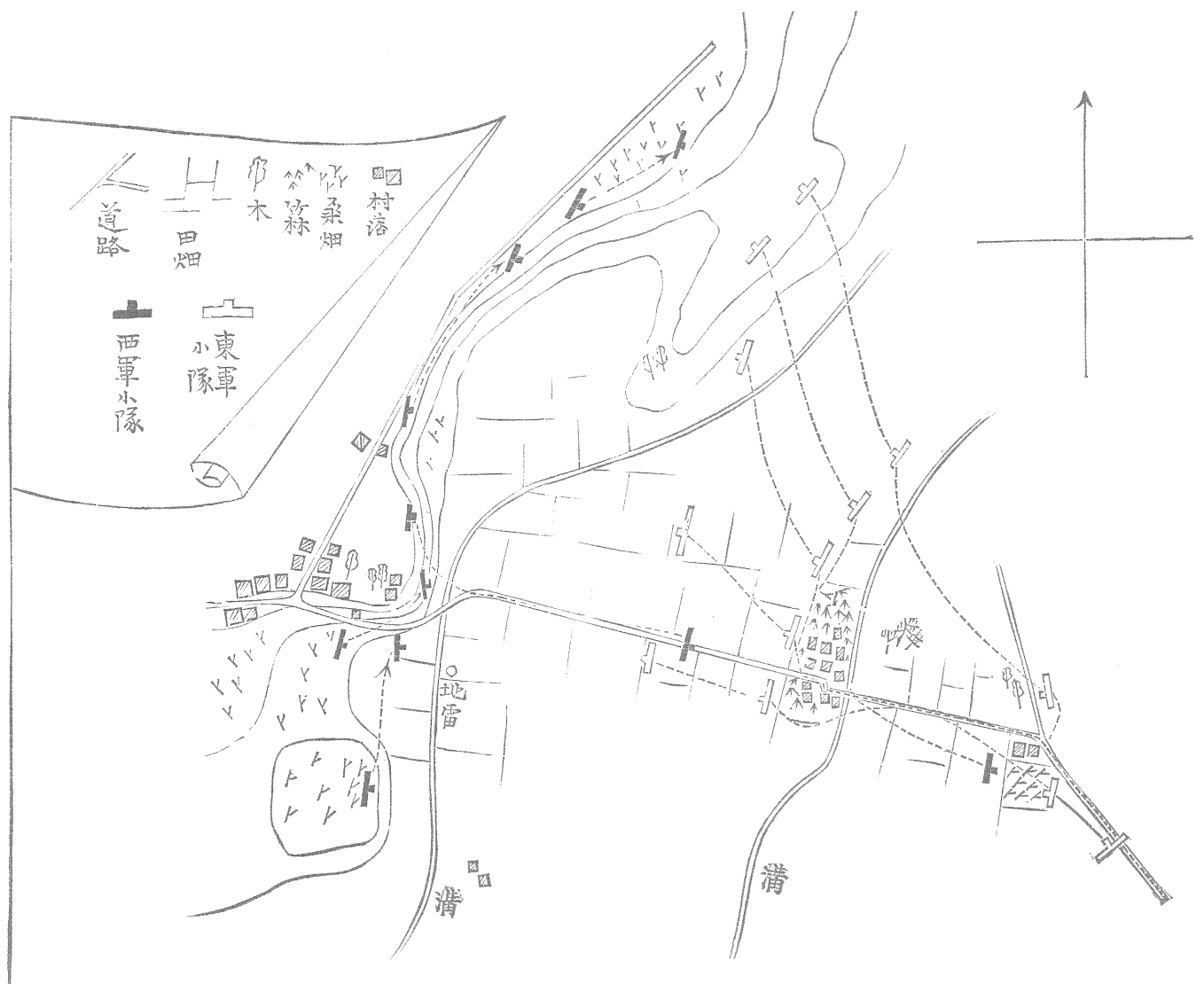
(假設)

五 大小行李は山鹿に退却して別命を待つべし

六

余は援隊にあり

兩軍已に命令を發す士氣頗に倍蕤し眼光閃々敵



其の至るを俟つ東軍は第一第二中隊の前衛より更に斥候を派し行々敵情を窺ひ進んで石口に入らんとす偶々西軍の斥候見ゆ此地田藤相連り人家二三其間に點綴え一縷の坦道此間に通するのみ東軍乃ち翼を左に張り西軍の尖兵を撃退し進んで石口を取る西軍退き下高橋の竹林に隠れ以て東軍を狙撃す東軍は其直進の利なきを知り翼を左右に張り以て西軍の横に出づ西軍の下高橋を保つや元是れ敵の勢を挫かんとするにあり期する處は來民の要害に據り以て東軍を俟つにありのみ來民の地たる東端臺地連り前面空濶にして田藤連り一夫守れば萬夫容易く進むを得ざる處只西方の一端廣野に在て敵或は此より進むべし乃ち兵力を茲に集中せ且地雷を布設て敵の進入に備ふ東軍素より其地理を知る而て敵或は要害を待んで怠ることなきかを謂ひ寧ろ其左翼の要害を衡き一舉に在て之を抜がんと欲す然れども一望空濶田藤中僅かに彙簇の處々に堆積するあるのみにて一も他に身を寄するに足るものなぞ即僅かに兵を街道の兩側に留めて西軍を控制せよめ益々翼を敵の左翼に張る西軍能く防

ぎ東軍進むを得ず兩軍奮戦甚だ勉む雷聲耳を聳え硝煙空を蔽ふ將に是れ双龍相爭ふて天色光なく兩虎相闘ふて聲九天に徹す壯絶快絶名狀すべからず戰既に酣に在て東軍着劍て突貫敵壘を取らんとす倏ち聞く休戰の聲は鐵笛より響くを此に於て砲聲始めて止み殘烟僅かに脉々たるを見るのみ時に九時五分なり即集合を令て兩軍を集む兩軍凱歌を唱へて來るは互に其功を誇るものか特に見る西軍の某小隊長腰下霽く淤泥に汚されたるを嗚呼是れ泥中に陥りえか或は反銃丸に打たれて一度泥中に跪きしものか知らず氏常に陣頭に立ち部下を麾ひて士氣を鼓し此際誤て泥濘に迂りしにあらざるなきを休憩半晌沼田監督の講評終り隊を合して發す兩脚再び急に在て泥濘を没すされども五百の健兒已に戰鬪の難に堪ゆ豈漫りに行路難を歌ふものならんや來民町を過ぎ蜿蜒たる道路に沿ふ此地は是れ三年前同じく我が校の軍を講せし所其行に従ひえもの自ら今昔の感に堪へざるものゝ如きはより半里にして山鹿町に入り隊伍を解て各自宿に就く

山鹿町は熊本を距る北微西七里にあり城北第一の繁華の地なり町の中央に温泉あり是れ一名湯町の名起る所以なり濡装を脱ぎて温泉に浴す所謂是れ一浴洵然四体伸もの誰れか快哉を叫ばざるものあらんや

十七日、曉起戸外に出づれば雨尙歇まず昨日の濡衣未だ乾くに暇あらす再び雨を冒きて泥濘を踏まんとす素より快と稱すべからずと雖も遠征の健兒亦決て之に避易するものにあらす六時喇叭集合を促せば五百の健兒盡く集まり鞋痕を城北の野に印するを喜ぶものゝ如き六時半即發す兩日の雨天泥濘甚く視線は常に兩足に注がざれば將に或は淤泥に塗れとす兩側の山體秋景に富まざるにあらざれども烟靄錦繡を包んで一も心目を慰するに足るものなき漸く進んで植木に達し休憩時餘午餐を喫して疲憊の將に至らんとするを復す是より熊城僅かに三里垣々たる街道泥濘甚く趣味亦鮮きと雖も元是れ數時間の行路に過ぎず軍歌一齊當に勇を鼓すべきのみ山法師塚を経て出京町に達す乃ち隊伍を整へて京町に入り新坂に至りて止まる此に於て隊伍を解

き各自宿に歸るべきを命ず蓋し兩日の雨路大に行路に悩めるものあるを以てなりと二泊行軍長きにあらす踏破する所亦二十里に過ぎず然れども此間武を講じ艱苦を嘗めざるもの却て意氣を強ふするものなくんばあらす殊に熊本郡出身生徒諸子の懇切なる斡旋と各地官衙の周到なる注意とは旅宿其他につきて遺憾なからざるなり彼の來民町の如き隈府山鹿の間にあり各相距る遠からず旅客の宿するもの隈府にあらすんば即ち山鹿なり之を以てか公然旅宿を業とするもの僅かに數戸素より一時に多數の旅客を收容すべくもあらすされば全軍半部の宿泊に於ては其困難名狀すべからざるものあらんとは吾人が出發當初に於て想像せし處なり然るに全地有志諸士の熱心なる相競ふて宿泊處を引受け種々鄭重なる待遇を與へられしは吾人の感謝して措かざる處なり

今回の旅行たるや専ら發火演習を目的とす、よしや兩軍相衝突する僅々一回に過ぎずと雖吾人は必ずや壯絶快絶城北の野を震撼するものあらんを豫期せり是に於てか不肖任にたえざるも

なほ秃筆を刮めて之を待つ而かも演習は何等の興味なく何等の記すべきなき一兒戲の如くにして終りぬ吾人むしろ呆然たらざるを得ざるなり戦ふに當りて先づ其地形を擇ぶの要あるは吾人亦之を知る壘を高ふし濠を深ふし坐ながらにして敵を壓殺するも亦兵家の一策ならん西軍が東軍に對するに始終來民町東端の一高丘にありて防戦に力めたるは問はずして此策に出でしものたるを證すべし而かも我校學生の演習とて吾人は此の如きの策を取るべからざるを信するなり其勝敗の如何は暫らく措き學生の演習は須らく勇壯活潑なるを要す或は敵を一方に牽制して其虛を衝き或は守勢を變じて攻勢を取るが如き機敏の運動をなすを眼目とすべし蓋し此の如きは軍に演習上の技倆を養ふと全時に一方に於ては他日爲すあるの基に資するところ鮮なからざればなり吾人の見る處を以てすれば、西軍がはじめ來民の東端高地に據守之徒らに其要害をたのみ且其前面に地雷を布設て坐ら敵軍の來襲を待つ策に出で之は實に此演習を以て興味なからざる主因たらざるを得ず若しそれ他に

據るべきの地形なくんば乃ち止む而かも其前方里餘の間には充分に快戦をなすに足るべき地形ありてなほ且前面に地雷を布きて一處に據守するをなす、吾人は斷じて其可なるを知らざるなり吾人は同朋雜誌々上發火演習を記する勇絶壯絶なるものあるを見常に欽羨措く處を知らざるなり彼の運動や活潑なり彼の動くや機敏なり故に其戦は一の疎漏なく一の失策なくよく其目的を達す我的運動や之に反す焉くんぞ壯絶快絶なる活劇を演ずることを得べけんや或は曰く彼はよく習熟す我は未だ之を以て其彼に及ばざるの口實となす嗚呼何ぞ思はざるの甚しきや試に問はん彼は何が故に習熟し我は又何が故に習熟せざるか彼は演習を行ふと年數回我は之を行ふこと年僅かに一回其彼我の間に軒輊あるや元より論なきなり吾人は切に學校が發火演習の度數を今少しく増加せられんとを願はずんばあらずそれ兵式操練に貴ぶ處は規律の嚴守なり苟しくも軍隊組織なる以上は其動く止まるを問はず一定規律の下に服せざるべからず殊に我校修學旅行はたゞ其生徒自身に付きて得る處多きの

みならず地方に向て我校のあるを知らせむるものたらざるを得ず乃ち學生各己人に於てつとめて我校を辱めざらんをつとむると全時に若き之に反するものあらば學校は之に對して斷乎たる處置に出でざるべからず然り學校は締るべき處には大に締らざるべからず寛恕すべき處には大に寛恕せざるべからず只其事に接してよく寛嚴を誤まらざるを要す

夫れ一たび校門を出でゝ行程に上ばる其歸るや再び校門を入らざるべからず其集合するや校内に於てす須く其の散するまた校内に於てせざるべからずこれ鎖事に似たるが如きもたしかに一の規律たらざるを得ず己に此規律を放棄す焉くんぞ更に大なる規律を守らしむべけんや連日降雨のため道路泥濘一行の疲勞これがために一層大なりしは元より然るべきなり而かも其疲勞せるがため僅々十數丁にまて我校に達すべきに之を解散せしむるが如き不規律の處分に出づべきか其疲勞せると否らざるを問はず己に軍隊組織なる以上は十數丁を忍んで學校に達すべきはこれ生徒たるものゝ義務ならずや吾人は信ず

生徒一同の期せし處また實にこれにありしならんを京町街上自由解散の命は寛恕にあらずまて却りて規律の守るに足らざるべきを告白するものにあらざるなきを得んや吾人は當局者の考察を願はざるを得ざるなり妄言多罪